

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- 女性の力が社会を変える 1
- ネパール現地調査報告 2,3
- 地球の木チーム紹介
—あなたの好奇心とやる気、生かしてみませんか— 4,5
- アジアの国を知ろう！ 第2弾ラオス編 6
- 地球の木と私 6
- 気仙沼だより 7
- 活動日誌 7
- INFORMATION 8
- 編集後記 8

女性の力が社会を変える

「ニルマラさん」というネパール人女性の名前を覚えていますか？ 2000年に来日した時、彼女の話聞いた方も多いかも知れません。11月初旬、地球の木は支援地に調査に行き、ニルマラさんにもお会いしました。今号では、びっくりするような、嬉しいニュースをお知らせします。

村長さんは 識字教室の 卒業生

ニルマラさんは、現行プログラム「幸せ分かち合いムーブメント」の前に、ネパール極西部で行っていた教育支援プログラムのキーパーソンです。

ニルマラさん率いるNGO・SOARSとは支援が終わった後も交流を続けてきました。私たちの蒔いた種が実り、「女性グループから3つの協同組合が誕生した」「福祉分野で目を見張るような展開があった」といった情報は今までも得ていました。

嬉しいニュースとは、地球の木が1997年から12年にわたって支援した識字教室の卒業生たちが、20年ぶりに行なわれた今年5月の首長選挙に立候補し、5人が当選したという知らせです。1999年に識字教室を訪問した時、「暗闇だった私の人生に光が射した」、「計算できるようになったので、町に買い物に行っても騙されることがなくなり、怖くなくなった」、「子どもたちは絶対学校に行かせる」と、目をキラキラさせながら字が読める素晴らしさを語っていた女性たち。今も彼女たちの姿が脳裏に焼き付いています。

地球の木は、ネパール極西部で81クラスの識字教室を支援し、2,000人以上が参加。ほとんどが女性です。一年間の授業にかかる費用1人1,056円。会員の皆さまに「1000円募金」を呼びかけ、たくさんのご寄付をいただきました。皆さまの支援した女性たちが、今、地域を動かす力となっています。これぞ女性のエンパワメント。私たち一人ひとりの力は小さいけれど、みんなの力で遠いネパールの村々に変革の風を起こすことができました。声なき人々が声を上げ、自分たちの村を自分たちの手で向上させる。識字教室がそのスタートでした。



講師はアメリカからボランティア参加。講師左奥がニルマラさん

繋がる 女性たち

ニルマラさんたちは、かつて地球の木が建設費の一部を支援した「イマドール訓練センター」で、17～25歳の女性を対象としたリーダー研修 (World Academia for the Future of Women) を実施していました。1年に100人のリーダーを送り出す計画です。私たちが訪問すると、センターは、若い元気な女性たちの熱気に溢れていました。「幸せ分かち合いムーブメント」の現地パートナーSAGUNの女性リーダー2人にこのリーダー研修の話をするとても興味を示したので、ニルマラさんに引き合わせることにしました。2人はあっという間にニルマラさんと意気投合し、講師としてリーダー研修に招待されることになりました。ニルマラさんもマンガルトール村に行くと言います。

旧プログラムの最終調査に行った2008年、女性グループが繋がり協力し合って大きなうねりを作っていく様子を目の当たりにして、「これからのキーワードはネットワークだ」という強い印象を受けました。10年経った今、新旧プログラムのキーパーソンたちが繋がりました！次はどんなことが起こるか、わくわくしますね。
(ネパールチーム 乳井 京子)

ネパール 現地調査

2017/10/31 ~ 11/8

良い人間関係のないところで良い仕事はできない。「開発」を語るときSAGUNの人々がよく口にする言葉です。今回の調査で直接たくさんの人たちと触れ合い、相互理解を深めることができました。



”Yes we can!”

オバマ大統領が就任演説で繰り返し使った、あの有名なフレーズをネパール国境の村に暮らす女性たちと共に復唱するとは思ってもみませんでした。地球の木が、ネパール大地震の被害が大きかった地域で昨年始めたヤギの飼育プログラム。ヒマラヤを望む、1,700mの高地ラジャバス地区(マンガルタル村)に暮らす、貧困家庭の女性たちが対象です。遥々集まってくれた女性たちにヤギの生育状況を尋ねると「2匹買ったヤギが7匹に増えました。雄ヤギ2匹が24,000ルピー(1ルピーは約1円)で売れたので、お米と家族の服を買い、子どもの学費に使いました」「地球の木の支援があったので、前から欲しかったヤギを買うことができました」など喜びの声。「それでは、皆さんの夢は？」と聞くと、一番若そうな21歳のリナ・サハさんが、「ヤギを売って水牛を買いたいです」と答えます。1匹買ったヤギがやっと3匹に増え、まだヤギを売ってもいないリナさんの爆弾宣言に女性たちは大爆笑。「すごいですね!!水牛っていくらなの?」「大きさによるけれど、8,9万ルピー」「水牛を飼いたい人いますか?」と畳みかけると、全員が手を挙げたのにはびっくりしました。「今度来るときに



水牛を買えるようにがんばろう!

来た村で、子どもたちの服装からみてもラジャバス地区よりずっと貧乏そうです。「地震の時はありがとう! ビニールシートが来るまでは、地面に何も敷かずに寝ていました。本当に嬉しかったです。たくさんの花の首飾りと黄色いカガというショールで歓迎を受けた後、話し合いをしました。前の日に会った、ラジャバス地区の元気な女性グループの話をする、1週間前に25人の参加者が選ばれたばかりで契約書も交わしていないというのに、「私たちもヤギを増やして、水牛を買えるように頑張ります」と口々に言ったのには圧倒されました。ここでも”Yes we can!”をネパール語で宣誓。笑顔が広がり、村の女性たちも支援する側の私たちも幸せを感じたひと時でした。



「水牛を買いたい」とリナ・サハさん(右から3人目)

は、きっと水牛を飼っている人がいますね。思いは必ず形になるので、ここでオバマ大統領の言葉を紹介し、「私たちならできるよね」と誓い合いました。

幸せを分かち合う

翌朝、1月から収入創出プログラムを始めるという、隣村コカム地区の女性たちを訪問しました。ここは、地震の被害が大き

真の開発とは…

地球の木のパートナーNGO・SAGUNの、揺るぐことのない信念は、「村の人々が幸せにならないような開発は、真の開発とは言えない」です。今回、支援地域を訪れ、たくさんの笑顔に出逢って、私たちが10年にわたって行なってきた「幸せ分かち合いムーブメント」のコンセプトが、SAGUNの会報『ロシ川のさざ波』のように流域の村々に広まり、人々を力づけていることを肌で感じました。

奨学生たちのその後

年末募金で会員の皆さまにご寄付を呼びかけ、16人の11、12年生の学費の支援を続けてきた奨学金制度は、今年で11年目を迎えました。

今年卒業した奨学生は皆、結婚したそうですが、これまでの卒業生の中には、村のリーダーとして地域の人たちの面倒を見てい



校長先生も一緒に折り紙交流

る人、母親たちの識字教室で教えた人、大学に進学した人もいます。今回、追跡調査した第2期奨学生のメンドーマヤさんは、カトマンズの大学に進学。1日7時間レストランのレジで働きながら大学を卒業し、女性たちの憧れの職業である歯科衛生士になっていました。3ヵ月後、もっとよい条件で働ける病院の試験に挑戦すると意欲的です。

マス・ヒステリア

このような成功例がある一方で、歴史的に抑圧を受け続けてきたタマン族の女性たちは、多くのストレスを抱えています。家

庭での仕事量が男子生徒よりも多いため宿題をする時間がない、勉強ができないと先生から冷たくされる、15、16歳になると親から結婚話を持ちかけられるなどです。特に初潮の頃、ストレスは頂点に達し、てんかんのような発作を起こす女子生徒がいます。それが周りの女の子たちに伝播する「マス・ヒステリア」があちこちで起こっているそうです。ネパールの多くの地域で、月経中の女性を不浄な存在と見なして屋外の小屋に隔離する慣習が根強く残っているからです。このような文化的、社会的な多くのストレスに苛まれた女子生徒たちの頭の中は、まるでシュッシュと蒸気を吐く圧力鍋の中のようにになると、教育心理学が専門のSAGUNプログラム・コーディネーター、マハタさんは言います。個人で解決できない問題、それは社会で解決しなければならない、と。

心の通う授業

マハタさんの教師トレーニングは、先生たちの間でとても好評です。地球の木が支援する3人の小学校の先生たちも、「ゲームや歌を使った、楽しい教え方を学び、活用しています」と言い、生徒たちも「先生の授業が好き」と笑顔で答えます。切り立った崖の間の道なき道を登った、2教室からなる校舎で教えているウルミラ先生は、「生徒たちから学ぶことがあり、そんな時、幸せを感じます」と微笑みます。マハタさんが情熱を込めて先生たちに伝えようとしている、一方向ではない、対話を重んじた教育を秘境の地で実践している先生がいることに感動を覚えました。

(ネパールチーム 乳井 京子)

私の初ネパール —調査に同行して—

10月31日の0時過ぎに羽田を出発、バンコクを経由してネパールのカトマンズに同日の昼過ぎに到着した。空港には、SOARSのニルマラさんとSAGUNのサルバジットさんが出迎えてくれ、まずは抱きしめられ、スカーフを首にかけられ(習慣)、びっくりするほどの歓迎を受けた。

日程は、最初に支援地であるマンガルトール村の5地区に行き、小学校等訪問やヤギ飼育プログラム参加者からの聞き取り、そしてカトマンズに戻りSAGUNとの現状分析や今後の支援のあり方などの話し合いや、SOARSの新しい展開について情報交換するなど、山盛りのミッションを用意して行った。それを乳井さんが英語力にものをいわせてこなしていく。さらに村人たちをはじめたくさんの人たちと交流し、語らい、親交を深める時間をもった。どこに行っても歓迎された。これまで地球の木の支援の在り方が現地を受け入れられている証拠であり、それを築いてきた丸谷さんたちネパールチームの努力を見る思いだった。

また、今回の調査ではネパールの行政組織改革や教育などのシステム変更等についても報告を受けた。多様な民族や伝統がある国での海外協力は、同じような理念、価値に基づき、支援プログラムを構築する現地NGOとの協力は必須

だ。こちらから足を運び、常にお互いの相互協力体制を作っていくことの重要性を改めて感じた。

それにしても2,000メートル位の山々に点在する村を訪ねる

のは命がけ、細くて轍が出来ている道、それにももちろんガードレールもない。道は急でつづら折りのようだった。川と道が一体化しているところもあった。カトマンズは、インフラ整備が途中で道はものすごい土埃、その上渋滞、道もぼぼこ、車の移動しかないネパールの1週間、首と肩が痛い。

村では山羊、水牛、鶏がどの家でも飼われている。みんなおとなしく、近くに育つ草を食べているせいかな、大きさもほどほどで可愛い。イヌはいたが猫は見かけなかった。山羊の肉は高く売れる(キロ1,000円位とか)と言っていた。山羊は頭からしっぽまで全部食べるそうだ。山羊の胃をよく焼いたものをシュレスタ教授の家でご馳走になったが、おいしかった。

(理事 大嶋 朝香)



ココム村ようこそ、ナマステ!

チーム紹介

あなたの好奇心とやる気 生かしてみませんか

地球の木は26年目の新しい歩みを始めています。「分かち合う暮らし」をテーマに、地球の木らしい「国際協力」と足元を見つめる「国内活動」。これらの活動を担うのは、何と云っても有志会員が集う以下6つの「チーム」です。今号は各チームに話を聞きました。たくさんの仲間と出会いながら多彩な活動を広げ現在につなげてきた地球の木。その未来を考える時、これらのチームこそ「地球の木の命を支える大切な枝だ」と思えてきます。どのチームも新人大歓迎。あなたも仲間になりませんか。少しでも興味をお持ちの方、是非お電話下さい。待っています！

■ 地球の木事務局 ☎045-228-1575 ■

たうんチーム

10 月初め、関内のあるにぎやかなイベント会場の一角で「たうんチーム」は、ワークショップ「ぶっ飛びアジアクイズ大会」を行っていました。経験豊富なチームのNさんが、年配の方も小学生の子どもたちをもとてうまく話しに引き込み、和やかに支援地のラオス、カンボジア、ネパールのクイズを進めます。クイズを通して、その国のことや人々の暮らしを知ってもらいます。いろいろ質問を受けたり、また所要所で地球の木の活動もしっかりとアピールして20分ほどで終了。それを同じように3回行ないましたが、全部で15人くらいが参加してくれました。「大勢の人が話を聞いてくれると本当に嬉しいです」とみんなに声をかけていたチーム長のSさんも笑顔です。



地球の木の活動の柱の一つに社会教育事業がありますが、その中の大切な地域活動を担っているのが「たうんチーム」です。様々なお祭りやイベントに参加し、多くの人に地球の木のことを知ってもらいたい、そして仲間が増えたらいいなと願いながら活動しています。誰にでも興味を持ってもらえるようクイズを短いものにしたり、分かり易い簡単なツールの作成などにも取り組んでいます。

「限られた地域だけでなく、もっと県内のあちこちに地球の木を広めに行きたいので、地域の皆さん、機会があったら是非私たちを呼んで下さい」との事です。

クラフトチーム



1 イベントやお祭りなどで、地球の木の紹介をしながら「幸せ分かち合いクラフト」の展示、販売をしています。商品の買入れから、販売の計画や準備までチームで力を合わせて行なっています。「ラオスの少数民族の伝統の刺繍のついた小物や、さまざまな事情のある生活を送るカンボジアやネパールの女性たちの作るグッズには、一つひとつにいろいろな思いがこもっています。とても素敵なそれらのグッズを扱うこと、そして皆さんに求めていただけるのは喜びです」とUさん。オリジナルのフェアトレード品(スカーフやバッグ)の企画・生産では、現地の人たちとのやり取りに苦労することも多々あるようですが、美しく製品が仕上がり皆さんにお届け喜んでいただけることにはやりがいを感じています。

生活クラブ生協のあちこちにあるデポー(店舗)で、展示販売も行なっていますが、今年度から有償ボランティアの方々にも参加していただくようになりました。何回か行く同じデポーで「これ前に、買ったのよ」と言って、その袋を下げ再度立ち寄って下さる方々の笑顔に出会えるととても嬉しくなります」とTさんが話してくれました。

実際にグッズを見てみたいと思われる方は、事務所や、ぜひお近くのデポーの展示会にお越し下さい。

出前講座チーム

学 校(小、中、高)や地域に、こちらから出向いて行なう「出前講座」は地球の木ならではのものです。海外支援をしつつ自らの暮らしを見直そうという「地球市民教育」の役割を大きく担っています。先方からの依頼を受け、いろいろなワークショップを行ないます。アジアの国の人たちの自立支援活動が続ける中から生まれた、地球の木オリジナルのワークショップ「マジカルバナナ」「ネパール・タル族の家族ゲーム」「ラオスの森・村の暮らし」など。また身近な食の問題がテーマの「未来の食卓」、世界の多様性と格差の問題に迫る「世界が100人の村だったら」など。



チームメンバーはラオスチーム、ネパールチームと必然重なりますが、そのファシリテーターぶりは鮮やか。その一人、元教師というYさんに聞いてみました。「やりがいを感じる時? そうねえ、こっちの意図が通じて、うまく展開して方向が見えた時かしら。高校生位になると、自分たちの新しい考えも入れて最後にうまくまとめてくれたりしますから」。また「出前に行く前には、先方に合わせて少し変えてみたり勉強し直したり、結構時間をかけているんですよ」とも。

悩みは次を担うファシリテーターの育成が進まないこと。オリンピック・パラリンピック教育推進支援事業ということで、東京の学校からも出前講座の依頼が来ています。興味のある方いらっしゃいませんか?

ネパールチーム

い きいきと楽しそうに活動しているチームです。遠い国だと思っていたネパールを私たちにとても近づけてくれました。チームのスタートは、20年前の極西部の少数民族の女性たちへの識字教室の支援でした。2007年からは、マンガルタール村で「開発は計画から村人の手で」を合言葉に「幸せ分かち合いムーブメント」を進めています。教育の質に大きな格差があるネパールで、村にいながら質の高い教育を受けられるようにすることで、若者たちの流出を防ぎ、地域の力となるよう、教育支援と生活改善の支援を行なっています。10年の節目でもありこれからは、住民主体の開発を次の村へ広げたいと思っています。

チームは、現地と密なやり取りをし、成果の視察や確認には実際に現地を訪れています。国内では、その報告会を開き、ネパールから招く支援関連の方々による講演会やワークショップなども開催し、会員がいろいろ知り学べる機会を設けています。また、支援地の村にホームステイするスタディツアーを実施していますが、参加者からとても高い評価を受けています。

最初からネパールの支援に関わるNさんは「私たちの支援が、少女たちの人生を変え、村を変えることを目の当たりにする時、地球の木の活動に携わっていてよかった!と幸せを感じます」と語っています。まさに「幸せ分かち合いムーブメント」です。

(今号ではネパールチームが11月の現地訪問の様子を詳しくレポートしています。あわせてお読み下さい)



ラオスチーム



G DPが低くても、自然が豊かでその自然資源により飢えることのないラオス。GDPが高くても、自殺者が年間3万人を超える日本。どちらが豊かと言えるでしょうか? 長年、支援を続けてきたラオスからは「豊かさとは何か」ということを常に考えさせられます。

ラオスチームでは現地に行ったり報告を聞いたりを重ねながら、活動を実施する日本国際ボランティアセンター(JVC)を通じラオスの村の人々の自立支援を温かく応援し続けてきました。国内での「ラオスという国を知ってもらおう」という活動も地道に進めています。ラオス報告会などの折には、メンバーがラオスの手作りデザートを準備したり、ワークショップ用に子ども用のシン(巻きスカート)を仕立てたりと頑張っています。開発は誰のため? 自然と共生する持続可能な暮らしを日本に伝えることで、私たちの今の暮らしを見つめ直すことができる。また日本の環境破壊や公害の経験を伝えることも大切ではないか。そんな思いでコツコツ、楽しみながら集っているラオスチームです。

会報作成チーム

チーム員は5人。他に2人の理事が理事会とのパイプ役として加わっています。年4回発行する会報誌は、会員が地球の木の活動を知る唯一の大切なツール。時々その責任をかみしめつつも楽しくやっています。1号完成させるのに3~4回の編集作業と、発送作業で事務所に集まります。このチームにいる良い点は、地球の木の活動の全体に触れるので「ウーム、勉強になる!」ということでしょうか。

会報誌は1991年に地球の木が設立されて以来、欠かさず発行されていますが、8年後の1999年にNPO法人となった時から新たにカウントし始め、今号は73号になります。カラー刷りになったのは2013年から。



編集長役のNさんのもと、原稿集めに毎号ハラハラしながらも何とか送り出してきた会報は、地球の木の活動の真面目な「記録誌」とも言えます。後からチームに加わったHさんは「地球の木の何たるかもよく知らず仲間に入って10年余。未だに新入気分ですが、会報編集作業に関われることをありがたく思っています」と謙虚。一番軽やかな気分で働くのは、出来立てほやほやの会報誌を会員さんたちに送る発送業務です。時々ボランティアで手伝って下さる方がいて助かっています。あなたもいらっしゃいませんか?

第2弾
アジアの国を
知ろう
ラオス編

ちょっぴり体験！ — ラオスの村の暮らし —

このワークショップは、地球の木が支援しているネパールやラオス、カンボジアのお国柄を理解することで、地球の木の活動を普及し、新しい仲間を増やしていこうという目的で行なわれています。

7月のネパールに続き、8月22日(火) 夏休み企画としてラオスのワークショップを行ないました。東戸塚の、素敵な地域の居場所「お茶の間楽交(がっこう)」を利用し、ジュニアからシニア層まで、気楽に参加してもらえるよう呼びかけました。

当日の参加者は12人。ラオスの民族衣装「シン」の試着に始まり、その後実際に村で使われている生活グッズ(ご飯入れ、天秤棒、背負籠、焼き付けなど)を手にとって、お隣同士でこれが何に使われる物か話し合ってもらいました。「そういえば昔、うちの田舎でも使っていた」とか、「一体これは何??」とか、初対面ながら話がはずんでいきます。また中学生には実際に天秤棒で水を運ぶ体験も。

さらに写真で村の暮らしを紹介すると、森を大切に利用する点や森の精霊への畏敬の念など日本との共通点も見えてきて、最初に抱いていた「遠い見知らぬ国」に親近感がわいてきたようでした。そしてこの大切な森が村人の合意を得ぬまま伐採され、ゴムのプランテーションに代わってしまった現状についても話しました。

こんな感想をもらいました。「ラオスなんてどこにあるかも知らなかったが、初めて知ることばかりで楽しかった」

「大変ですがエコな暮らしを私も実践しています」

ラオスの村の暮らしのいいところが伝わるよう練り直した私たちのワークショップ。どこにでも伺います。呼んでください。(ラオスチーム 中野 真理子)



遠いラオスが身近な国に

地球の木に入会して25年になりますが、地球の木の会員で本当によかった！と改めて思った出来事がありました。それは、難民を支援している方の「大手支援団体が戦争被災者に持ち込む、大量の資金と物資が、あつという間に難民の心根を腐らせた」という言葉でした。地球の木は「共に生きる」という、対等な立場で自立支援を行ない、確実な成果を挙げていることが、毎回の会報から伝わってきて、大いに共感しています。

さて、冒頭に挙げた、残念な事実は「お金を出せば人助けになる」という思い込みを打ち砕くものですが、「自然エネルギーは環境に優しい」という主張も、同様の思い込みなのではないのか…。長年、反原発活動をさ



れてきた社会活動家、山田征さんとの出会いで、思考停止していた自分に気付かされました。

ソーラーパネルや風車は、製造に多くの資源と大量の電気を消費し、設置でも大規模な自然破壊をもたらします(風車は、騒音や低周波音による健康被害も)。そして、耐用年数が過ぎると、深刻なごみ問題を引き起こします。また、発電装置に必要なレアアースは、鉱床に放射性物質を含有しているため、採掘現場で働く人や周辺住民は、被曝の危険性と隣り合わせ。とても環境に優しいとは言えず、異常気象の一因とも言われています。新技術を導入するには、あらゆる角度から評価検討することが不可欠ではないでしょうか。(横浜市金沢区 本田 まり子)

これからの支援を考えながら

— 9月25日・26日 気仙沼を視察訪問して —

東日本大震災から6年。緊急支援から始まった気仙沼の人たちとの繋がりを、「分かち合うくらし」をもとに今後どのようにつなげていけばよいのだろうか」と悩みながら、3人の理事で気仙沼を訪問してきました。

Tree Seedの小野寺大志さんが迎えに来てくれたJR「一ノ関」駅から、以前彼らが支援していた大船渡、陸前高田を視察し、その後気仙沼に向かいました。緩やかな流れの北上川を越えると一面に広がる田。黄金に色づき収穫間近の様子でした。ここが大きな被害があったとは考えられない穏やかさ。走る車の中からは広い駐車場を持ったショッピングセンターが見えます。新しい街づくりが始まっていることがうかがえました。

しかしその景色も、海に沿って走ると一変します。土を積んだトラックが行き交い、かさ上げ作業が進められています。かさ上げは均等にされているわけではなく、なされていない所もあり、土地はやはり個人の持ち物という事で、持ち主の承認がないと工事できないのだということを知りました。

持ち主が亡くなっている場合には相続人を探さなければなりません。そのことに時間がかり、見つかったも承認が得られないケースもあり、そんな話を伺うと復興の道筋を進める為には、いくつもの課題に直面している現状が見えてきます。かさ上げを行なっても、その地域に戻ってくる人はいるのだろうか。私たちが見ても、それには大変な条件が必要となるのだと思うばかりです。

6年という月日がこの気仙沼のまちをどのように変化させているのでしょうか。来年には震災の年に生まれた子供たちが小学校に入学します。地元で、子供たちのそ



震災から6年、いまだに大規模な工事が進む気仙沼市

ばで炊き出しや支援物資の配布・仮設住宅の見守りなど支援活動をしてきたTree Seedの小野寺さんは、「これからの活動は小中学校の子どもたちに向けたスクールリーダーの養成を進めていきたい。家族、地域がばらばらになってしまった生活で子ども達が未来を夢見て、再生した町で生き生き暮らしていけるよう、地域の中で学年を超えての仲間づくりや支え合いの気持ちを育てる事に力を使いたい」と話してくれました。

自分たちの日々の生活がある中で、地域の将来を一生懸命考えているTree Seedのメンバー。私たち地球の木はそのような彼らの思いを大切にし、彼らの求めに応じてアドバイスを行ない、見守っていききたい。地球の木が今後どのように彼らへの支援を続けていけばよいが、皆で考えていきたいと思いました。

(理事長 堀 千鶴)

活動日誌 (9月～11月 抜粋)

9月

- 23日 藤沢市民まつり (藤沢)
- 24日 ひらつか市民活動センターまつり (平塚)
- 25、26日 気仙沼視察訪問 (堀、植田、廣瀬)
- 28、29日 デポー展示会 (相武台)

10月

- 2、3日 デポー展示会 (せや)
- 6、7日 デポー展示会 (南林間)
- 7、8日 よこはま国際フェスタ2017 (みなとみらい)
- 8日 なか区民活動センター祭り (中区)
- 12、13日 デポー展示会 (たかつ)

19日 デポー展示会 (東戸塚)

26～30日 カンボジア訪問 (植田、竹内)

30、31日 デポー展示会 (緑園)

31～11月8日 ネパール現地調査 (乳井、大嶋)

11月

6、7日 デポー展示会 (みたけ台)

9日 WEフェスタ2017秋 (山下町)

11日 東日本大震災・復興支援まつり (みなとみらい)

18日 オルタ館フェスタ (新横浜)

27、28日 デポー展示会 (宮前平)

29、30日 デポー展示会 (のぼりと)

地球の木カレンダー 2018 「Have a nice day!」



好評発売中!

世界各地の紛争地に生きる人々や、シルクロード、アマゾンなど世界のさまざまな土地に暮らす人々を長年撮り続けてきた長倉洋海氏。あたたかな眼差しで捉えた写真があなたの生活を彩ります。購入ご希望の方は、地球の木事務局までご連絡ください。ホームページからも受け付けています。

◆写真家：長倉 洋海氏

◆サイズ

壁掛け：32cm×38.5cm (使用時60cm×38.5cm)

卓上：15.5cm×17.8cm×7.5cm

◆価格：壁掛け：1,600円(税込)

卓上：1,300円(税込)

◆制作元：日本国際ボランティアセンター(JVC)

イベント情報

よこはま国際フォーラム2018

2018年2月3日(土)・4日(日)10:00~18:00

場所：JICA横浜

地球の木では、2月4日(日)11:00~12:50に4F「いちよう」の部屋にて、地球の木ネパール調査レポート「女性の力が社会を変える」を行ないます。奮ってご参加ください。

第17回 南北コリアと日本のともだち展

2018年2月16日(金)~18日(日)

場所：アーツ千代田3331



ネパールスタディツアー2018

~支援地を訪ねるふれあいの旅~

自然に抱かれた地球の木の支援地、少数民族の村を訪ねます。地球の木はマンガルタール村とその周辺で、現地NGO・SAGUNと共に教育や収入創出のプログラムを進めています。2015年4月の大地震で多くの家屋や建物が破損しました。村に暮らすいいところは？そして課題は？幸せを分かち合うとは？人々と触れ合い、より安心できるコミュニティに必要なことは何か、語り合しましょう。

■日程：2018年2月23日(金)~3月4日(日)

■訪問地：カトマンズと支援地の村

■申込締切：2018年1月24日(水)

*詳細は地球の木事務局まで資料をご請求ください。



がんばる
笑顔
を
応援しよう!

~幸せ分かち合い年末募金~

皆さまの日頃のご協力を心より感謝申し上げます。今年も残りあとわずかになりました。ネパール、カンボジア、ラオス、気仙沼の人たちと、幸せを分かち合えるよう、皆さまからのあたたかい募金を何とぞよろしくお願い申し上げます。詳細は同封のチラシをご覧ください。

【寄付領収書について】

地球の木は認定NPO法人です。皆さまからいただいた地球の木へのご寄付は、確定申告によって所得税、法人税などの寄付金控除を受けることができます。申告には地球の木が発行する領収書が必要となります。2017年にいただいたご寄付につきましては、2018年1月末までに領収書をお送りいたします。

また、地球の木ではサポート会員の会費も寄付金控除の対象となります。サポート会員の会費はご連絡いただいた方のみ領収書をお送りしておりますので、申告のため、領収書の必要な方は事務局までご連絡ください。(既にご連絡いただいている方は連絡不要です)



特定非営利活動法人
地球の木



今号では、地球の木の各チームを紹介しました。それぞれ充実した内容の活動を再確認しました。私はといえば、無謀とも思える会報作成チームへの仲間入りでしたが、時を経て苦楽を共にすることのありがたさをかみしめつつあります。各チーム、新人を待っています。(MH)